Informilo de HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

Heroldo de HEL

N-ro 99　2004 (aprilo 20)

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO　北海道エスペラント連盟

ĉe HOŜIDA Acuŝi
Mijanomori 2-18-18, TOMAKOMAI
053-0844 JAPANIO

〒053-0844
苫小牧市宮の森2丁目18-18　星田 淳 方

La lago Notoro
(Not-ro = ejo de kabo)　3 marto 2004

100 号まであと 1 号！

原稿、アイデア、イラストなど何でもお寄せ下さい

ENHAVO　目次

3　La ainaj parencoj vivantaj en la For-Orienta Rusio *Oripak Esaman kaj MIYAZAWA Naoto*
極東ロシアに生きるアイヌの親戚たち　*オリパック・エサマン　宮沢　直人*

9　"La Sankta Korano" kaj "La Unua Amo"　*TOYOKURA Syogo*
読書録　「コーラン」とツルゲーネフ「初恋」　*豊蔵　正吾*

10　Tiu feministo samopinias al Esperanto
人類に一つ言葉を！

12　La 4a komitata kunsido
Rezolcio kontrau sendo de japana Memdefenda Koepuso al Irako
第４回委員会
イラク派兵反対決議

16　Danke ricevitaj　*HOŜIDA Acuŝi*
受領郵便物　*星田　淳*

17　Ne konsultu vortaron antaŭ pripenso　*KABAYAMA Tûsuke*
学習の小窓　エス和辞書に頼るのは最後の手段　*樺山　裕介*

18　Peto de helpo　*JOKOJAMA Hirojuki*
広告　支援のお願い　*横山　裕之*

20　Invito de la Maja Kunvivado en Oraru
新緑の小樽天狗山山荘に来ませんか？ ５月合宿へのお誘い

Pardonon, malfruiĝis tiu ĉi eldono !

次回委員会は５月 15 日、５月合宿でおこないます。

極東ロシアに生きるアイヌの親戚たち

エスペラント訳が7頁からあります

北海道エスペラント連盟極東ロシア訪問団　先住民族取材班

文　　オリパック・エサマン、宮沢直人
取材協力　ヴラジオストック エスペラントクラブ
　　ロシア沿海州先住民族協会

エスペラント運動は百年以上の長きにわたって、民衆の国際共通語の普及に携わってきた。この十数年、世界のエスペランチストの中には、人権としての言語権や、少数言語の尊重という考え方が広まっている。この運動の流れの中で、北海道エスペラント連盟はアイヌ民族との交流や、アイヌ文化の世界への紹介、また世界の先住民族に関する情報の日本語訳などを行ってきた。そして２００３年9月21日から10月12日までロシア極東のヴラジオストックエスペラントクラブの招待で現地の国際会議に参加し、その際ロシア沿海州先住民族協会の協力を得て、先住民族の人々の取材をすることができた。取材班の中心になったのは、エスペラント連盟員でありアイヌ民族でもあるオリパック・エサマン（28才男性）である。

ウデゲの苦悩

私たち極東ロシア訪問団6名は、ウラジオからバスで12時間、最後はぬかるみや穴ぼこだらけの道路にひやひやしながら、ロシア沿海州最北部に住む先住民族ウデゲの村クラスヌィヤールに向かった。村の祭りに参加するダンスグループの遠征バスに同乗することができたのだ。訪問団のうち3名は先住民族取材班として、じっくりインタビューできる人をさがすことにしていた。

私たちは祭りの会場で話しかけてきたカンチューガ・ヤコブ（57才男性ウデゲ）の家をその夜訪れることになった。玄関先には狩猟や魚取りに使う丸木舟が置かれている。家の白熱灯は電圧が低いのかちらちらゆれてみえる。夜中には村の発電所は止まる。

「おいしい、はフィミ。猫はクィケ。イノシシ？･･･さてなんだったかな？」ヤコブは少年のころ祖母と話していたウデゲ語を思い出しながら教えてくれる。取材班のエサマンがアイヌ語の単語を返していく。「ビキン川の秋は美しい。」ウデゲ語が私たちにはまるでアイヌ語のように聞こえる。ヤコブの父方の曾祖母はアイヌだという。ウデゲ語で末っ子の意味の名を持つ彼の自慢の祖父ナーディガはレスリングの選手で帝政ロシア時代に日本を訪れたことがある。彼には私たち日本人やアイヌが兄弟のように思えるらしい。彼の妻が紅茶と山盛りの菓子をだしてくれてすすめる。10代の息子と娘がはにかみながらあいさつした。ヤコブが鹿の乾し肉をだしてきて細かく割いた。

「ウデゲ語はけっして消滅した言語ではないんだ。村の小中学校では3年前までウデゲ語を教えていたし、去年は韓国のNGOが来て辞書の製作のための資金援助も約束していった。村に辞書が50冊もあればずいぶん状況はかわるだろう。」とヤコブは言う。バスの中で仲良くなったリューバ（19才女性ウデゲ）も「私たちはウデゲ語を自由に話せるわけではないけれども、全て忘れてしまったわけではないし、できれば、もっと学びたいと思っている。」と話していた。

だが、この村では言語や文化の存続の根本にかかわる大きな問題が進行していた。深刻な森林破壊がウデゲの人々の生活圏で起こっているのだ。ロシア全土で進む急速な資本主義化と外国資本の流入はここでも猛威をふるっていた。木材産業はロシア沿海州政府の税収源、雇用創出のうえで州の重要な基幹産業のひとつとされている。このままでは数年で木材資源が枯渇するだろうといわれるほどの伐採がおこなわれている。伐採業者のほとんどはロシア企業だが、違法伐採もあとをたたない。産出木材の多くは日本、中国、韓国などに輸出されている。北朝鮮も州内に労働キャンプを設置して貴重な外貨獲得源としている。1992年、韓国企業が直接進出し、沿海州北部の日本海沿岸の町スヴェトラーヤを拠点として大規模なタイガの伐採を開始した。

「この伐採地は、狩猟で生きているウデゲにとって最後に残ったともいえる大規模な森林地帯だったんだ。我々がいくら韓国企業にお願いしても、彼らは州政府の許可をとっているから相手にしてくれない。そこで伐採道路を封鎖して、木材の搬出を止めることにした。」ヤコブが真剣な顔になった。「周辺の村のウデゲの猟師が中心になって交代で2ヶ所のバリケードを守ることにした。5人ずつ一組になり猟銃を持って見張った。この時、国境警備隊のコサック兵がヘリコプターで応援にきてくれた。涙が出るほどうれしかったな。」私たちにはにわかに信じ難い話が出てくる。「92年と93年の二夏、我々はがんばった。やつらはその年木材の搬出はできなっかたんだ。ウデゲの村々では住民全員の署名を集めて州政府に訴えた。」

結局、州政府は伐採の中止を決定せざるをえなかった。沿海州先住民族協会の事務局長セリューク・ナジェージダ（45才女性ナナイ）はこのことについて語る。「これで問題が解決したわけではありません。今年も伐採の計画がもちあがったのです。私たちは再度署名運動を村々で行い、インターネットで海外にも訴えて阻止したのです。ただ、この森が守られてもウデゲの村々の周辺ではすでに原生林は残っていないのが実情です。実はウデゲの人々の中で狩猟で生計を立てている人はいまではそう多くはないのです。森林保安官をはじめ、なんらかの形で森林伐採に依存して生計を維持している人の方が多いのです。ただ現在の半分合法で半分非合法のような無秩序な伐採が続けば、遠からずウデゲの村は衰退し荒廃していくでしょう。」私たちは今後どうするつもりなのか聞いてみた。「タイガの重要性とそれを守るための方策を考えるシンポジウムを現地で開きたいと思っています。まず村人が考えなければならないのです。もちろん外国のNGOの協力も必要です。しかし、クラスヌィヤール村で、日本のNGOの薦めではじめたエコツーリズムのための施設作りは資金難のため滞っています。私は外からやってくる人々の話を鵜呑みにしてはいけないとも思っています。狩猟・漁猟、木材生産、観光、どれをとっても難しいのが現状です。ただどれを選択するにせよ、あるいはそれらのバランスをとっていくにせよ、タイガという自然の恵みを大切にしていく私たちの主体性と文化をもう一度見直さなければならな

いのです。」

ヤコブの話にもどろう。「我々ウデゲは昔この地で中国と対立して独立を守っていた渤海国の末裔なんだ。後にジンギスカンに攻められて国は滅ぼされ、人口も激減してしまった。」彼らはそう信じている。「ロシア革命後、森に生きていた我々は村に集められ農耕をさせられた。ロシアへの同化政策も行なわれた。スターリン時代にはそれまでいっしょに住んでいた中国人が強制移住でいなくなり、かわりにロシア人がはいってきた。中国人のなかにはウデゲの名前にかえてこの村に残ったものもいるよ。それでもソ連時代には狩猟に必要な銃や弾丸、ガソリンなどは無償で提供された。ソ連崩壊後は、生活に必要なものはすべて買わなければならなくなった。みんな金がなくてこまったね。」今はどう生計をたてているのか。「以前は虎の皮や鹿の角が中国や日本に高く売れたが、今はクロテンや鹿の毛皮をロシア人に売っている。森林伐採で森の木の実を食べるイノシシが減り、それを食べる虎はいなくなってしまったが、逆に伐採跡地にはえる草を食べる鹿はよくみかけるようになった。」毛皮に傷がつかないよう、わなをつかってつかまえるという。

夜も深まり、私たちは電気の供給されているうちに宿舎のホームステイ先に帰ることにした。「遠い土地から来た兄弟よ、私たちがここで生き、ここで闘っていることを、多くの人に告げてほしい。」ヤコブは別れ際にあらたまった口調で繰り返した。「手付かずのタイガが守られているこの森は、私たちウデゲの命というだけではなく、沿海州すべての人の、いや世界中の人々の宝だ。たくさんのメディアに知らせ、多くの人に伝えてほしい。そうすればこの森を守ることができる。必ずまたこの地を訪れ、私にアイヌ語で語ってくれ。」彼はウデゲ語でありがとうを意味する言葉「アササ、アササ」で私たちを送ってくれた。空には、彼の祖母も曾祖母も見ていたにちがいない満天の星が輝いていた。

都市に住む先住民族の新しい模索

私たちが出会うことのできたもう一人のアイヌ民族の子孫は，ヴラジオストック市に住むデェハーリ・スヴェトラーナ（39 才女性）である。彼女は私たちがクラスヌィヤール村へむかった際，バスに同乗させてもらった先住民を主体としたダンスグループ『ボンゴ』(ウデゲ語でさきがけの意）の中心メンバーの一人で村訪問の際には会えなかった人である。現在、沿海州少年少女キャンプ活動協会で指導員養成の仕事についている。

「私たちヴラジオに住む先住民は多くの場合、孤独になりがちです。私とアレクセイはみんなが集まって何か面白いことをやって、先住民族の記憶を引継ぎ発展させることができないかと考えました。」私たちのホテルをわざわざ訪ねて来てくれたスヴェトラーナは恋人のアレクセイとうなずきあいながら語りはじめた。「そこで私たちはハバロフスク市で私の妹がやっている民族ダンスグループの活動のようなことを、ここでもできないかと思ったのです。アレクセイはダンスなら若者も興味を持つし、ロシア人もウクライナ人も楽しみながら私たち先住民のことを考え

「るようになるのではないかと、賛成してくれました」ニコニコ笑いながら聞いていたベリドゥイ・アレクセイ(44 才男性ナナイ）はダンスグループのプロデューサー兼マネージャーで、広告会社のデザイナーとして働いている。「私はグループで最年長のメンバーです。最年少は 9 歳のターニャで、父親がロシア人で母親がウデゲです。グループではウデゲとナナイのダンスを中心にやっていますが、参加しているのは他に、ニブヒ、ロシア、ウクライナの青年たちで全部で 20 人ほど参加しています。結成してまだ一年も経っていませんが、すでに沿海州で 5 回ほど公演を行いました。まだ、公演曲目も少なく内容も未熟ですが、ゆくゆくは海外へも遠征し、ウデゲやナナイの文化を紹介していきたいとみんなはりきっています。生活環境が似ているためか、ウデゲとナナイの文化には共通点が多いのです。」

スヴェトラーナもこれからの活動の目標を語る。「まず演目を現在の 5 曲から 10 曲に増やしたい。木の根のように沿海州の少数民族の村々の交流をひろげることと同時に、極東ロシアでも圧倒的な多数派をしめるロシア人たちに私たち先住民が同じ人間であり、対抗するのではなく共生していこうとしているのだと言いたい。また、私たちは自分たちの歴史を学ぶことや、世界中の少数民族と連帯することの大切さも感じています。なにしろ、踊れば踊るほど知りたくなり話したくなるのです。」

それまで仲良く話していた二人が、先住民族の将来について話がすすむと異なった意見を述べた。スヴェトラーナは「私はどこに住んでいようが、ニブヒと自覚することが大切だと思っています。自治区も国境も関係ありません。」と言う。アレクセイは「自治区は絶対に必要です。自治区がないと民族文化は育っていきません。ナナイには不十分ながらも自治区がありますが、ウデゲにはそれすらありません。」と強調する。「自治区があれば、森林伐採に対してももっと有効な対抗手段をみつけることができるでしょう。」

私たち取材班は、毎週土曜日に行なわれている彼らのダンス練習を訪れることにした。市内中心部にある州立博物館のそれほど大きくない一室を借りて閉館後に集まるのは、10 人程のメンバーだ。予想に反して、練習時間のほとんどは民族ダンスではなく、ロシアンダンスの基礎練習だった。彼らはこうした基礎練習が、メンバーのトレーニングにはかかせず民族ダンスの質を高めるものだと考えている。練習にはダンサーだけではなくマネージャーのアレクセイやオルガナイザーであるスヴェトラーナも参加する。へたな者が多い。ためしに取材班のひとりが練習に参加したが、あっというまに汗がふきだし体は思うようには動かない。見た目よりずっとハードだ。

練習後、スヴェトラーナが一枚の古い写真を私たちに見せてくれた。幼い彼女と妹が祖母と写っている。父方の祖母ヤニュークはサハリンアイヌで祖父はニブヒである。母方の祖父母はそれぞれパリャクとウデゲに属する。スヴェトラーナ自身はニブヒとしてのアイデンティティーを持っている。「祖母が生きていたとき、私はまだ小さくて彼女がアイヌ語を話したかどうかはわかりません。とてもやさしい人でした。ぜひ日本のアイヌとも交流をしたい。どうか日本の人たちに私たちの状況や活動を伝えてください。」

私たち取材班は、彼女らの将来がどうなるのかについて、最後までわからなかった。だが、極東ロシアの村や町で、彼ら彼女らの模索はつづいている。

La ainaj parencoj vivantaj en la For-Orienta Rusio

La raporta trupo pri indiĝenoj el la karavano de Hokkajda Esperanto-Ligo al la For-Orienta Rusio

Verkis Oripak Esaman kaj MIYAZAWA Naoto, tradukis KABAYAMA Yûsuke

Helpis Vladivostoka Esperanto-Klubo kaj Rusia Apudmara Indiĝena Asocio

今回、前半「ウデゲの苦悩」のみＥ訳を載せました。後半「都市に住む新しい先住民族の模索」のＥ訳は次号までお待ち下さい。

Pli ol cent jarojn esperanta movado okupiĝas pri vastigo de la internacia komuna lingvo por popoloj. En la lastaj dek kaj kelke da jaroj inter esperantistoj de la mondo disvastiĝas la konceptoj t.e. la lingvaj rajtoj kiel homaj rajtoj kaj la respekto al malmultanaj lingvoj. Laŭ tia fluo de la movado, Hokkajda Esperanto-Ligo faras la interkontakon kun aina etno, sciigon al la mondo pri la aina kulturo, japanlingvan tradukon de informoj pri indiĝenoj en la mondo ktp. Kaj de la 21a de septembro ĝis la 12a de oktobro en 2003, ni invititaj de Vladivostoka Esperanto-Klubo partoprenis en tiea internacia kongreso. Tiam ni povis kolekti informojn de la indiĝenaj popoloj danke al helpo de la Rusia Primorja Indiĝena Asocio. La akso de la raporta trupo estis Oripak Esaman (28jara), kiu estas ano de la Hokkajda Esperanto-Ligo kaj aino.

Sufero de Udegeo

Ni, ses anoj de la karavano al la for-Orienta Rusio, veturis per aŭtobuso dek du horojn, la lasta vojo kun marĉoj kaj truoj timigetis nin, al Krasnuj-Jar, la vilaĝo de la indiĝeno Udegeo en la plej nordo de la Apudmara Regiono. Ni sukcesis gajni afablon de danca grupo kuniri, kiu partoprenos en la festo de la vilaĝo. Tri el ni planis fari raportan trupon pri indeĝenoj kaj ade serĉi homon intervjueblan.

En la festo al ni salutis KANCHUGA Jakob (57jara udegeo), kaj vespere ni vizitis lian hejmon. Antaŭ la pordo de la domo kuŝis unuligna boato por ĉaso kaj fiŝado. La lumo de la interna elektra lampo palpebrumis eble pro la malforteco de elektro. Dum malfrua nokto ĉesas funkcii la elektrejo.

"<Bongusta> estas <fimi>. <Kato> estas <kujke>. Apro? ...Hm kiel nomiĝis?" Jakob instruis rememorante la udegean lingvon, kiujn li parolis kun sia avino. Esaman el la raporta trupo respondis respektive samsignifan ainan vorton. "Aŭtuno de la rivero Bikin estas bela." La udegea sonis al ni kvazaŭ la aina. La avo de lia patro estis aino laŭ lia diro. Lia estimata avo Nadiga, kies signifo estas <la lasta filo> en la udegea, estis sportisto de luktado kaj eĉ iris al Japanio por matĉo en la cara periodo. Li sentus nin japanojn kaj ainon kiel fratojn. Lia edzino regalis nin per teo kaj multe da kukoj. Liaj dekkelk-jaraj filo ka filino salutis kun hontemeto. Jakob alportis cervaĵon sekigitan kaj disigis ĝin en pecetojn.

"La udegea certe ne estas malaperinta lingvo. En la elementa lernejo oni instruis la udegean antaŭ tri jaroj, kaj en la lasta jaro venis korea Ne-Registara Organizo kaj promesis monhelpon por udegea vortaro. Se kvindeko da vortaroj estus, la kondiĉoj ŝanĝiĝus," diris Jakob. Ankaŭ Ljuba (19jara udegeino), kun kiu ni amikiĝis en la aŭtobuso,

diris ; "Kvankam mi ne povas lerte paroli en la udegea, tamen mi forgesas ne ĉion. Se povos, mi deziras lerni plu."

Tamen sur tiu vilaĝo adis granda problemo rilata al la bazo de daŭrigo de la lingvo kaj de la kulturo. Severa detruo de arbaro okazas tra la vivteritorio de udegeoj. La rapidaj kapitalismigo kaj invado de fremdaj kapitaloj furiozas kiel uragano en tiu regiono kiel en la tuta Rusio. La ligna ekspluatado estas traktata kiel grava baza produktado de Apudmara Regiono pro ties imposto kaj multigo de dungoj. Tiel multe oni hakadas la arbojn, ke oni antaŭvidas, ke elcerpiĝos ligna materialo post kelke da jaroj, se daŭros tia hakado. La plimulto el la hakado estas farata de rusoj, eĉ malleĝa hakado ofte okazas. Multe el la ligno estas eksportataj al Japanio, Ĉinio, la Suda Koreio ktp. La Norda Koreio metas laborkampadojn en la Regionon, kio naskas karan akiron de fremda mono. En 1992 korea kompanio fondis sian bazon en la ĉemara vilaĝo Svetlaja en la nordo de la Apudmara Regiono, kaj komencis vastan hakadon de tajgo.

"Tiu hakota tereno estis certe laste restanta granda arbaro por udegeoj vivtenantaj per ĉasado. Kiom ajn ni petadis al la korea kompanio, ĝi malakceptis nin pro ĝia gajnita permeso de la regiona registaro. Pro tio ni decidis bari la portan vojon kaj ĉesigi la portadon de ligno." Jakob ekmienis serioza. "La udegeaj ĉasistoj de chirkaŭaj vilaĝoj alterne deĵoris ĉe la du barejoj. Kvinope ni gardis kun pafilo mane. Tiam venis kozakaj soldatoj de landlimo per heliikoptero por helpi nin. Estis tiel kortuŝite apenaŭ ke mi larmis." Nekredeblaj en la komenco por ni. "Ni obstinis en la someroj en 1992 kaj 1993. Uloj de la kompanio ne povas porti lignon dum tiuj jaroj. En udegeaj vilaĝoj ni kolektis subskribojn de ĉiuj kaj postulis ĉesigon de la hakado al la registara regiono."

Rezulte la regiona registaro estis devigita ĉesigi la hakadon. La sekretariestro de la Primorja Indiĝena Asocio SELJUK Nadjezida rakontis pri tio. "Ne finiĝis la problemo tiam. Denove ĉi-jare aperis hakada plano. Ni denove kolektis subskribojn kaj vokis eĉ eksterlanden per interreto; kaj ni ĉesigis la planon. Malgraŭ ke tiu arbaro povas resti, fakte netuŝitaj arbaroj chirkaŭ la udegeaj vilaĝoj jam ne restas. Verdire inter udegeoj jam nun ne tre multaj estas tiuj, kiuj vivtenas per ĉasado. Pli multaj apogas sin al arbara hakado iamaniere; ekzemple, arbara gardisto. Mi povas diri, se daŭros nuna malorda hakado de duone laŭleĝeca kaj duone malleĝeca, baldaŭ la udegeaj vilaĝoj malvigliĝos kaj kadukiĝos." Ni demandis kion ŝi faros. "Mi volas en tiu loko okazigi simpozion pri la graveco de tajgo kaj garda metodo por ĝi. Unue la vilaĝanoj devas mem pripensi. Kompreneble necesas helpoj de alilandaj Ne-Registaraj Organizoj. Sed en Krasnuj-Jar la konstruo de domoj por ekologia turismo, kion rekomendis japana Ne-Registara Organizo, stagnas pro manko de financo. Mi opinias, ke ni ne devas fidi tutan diron de venanto el ekstero. Fakte kiu ajn ni elektus el ĉasado, fiŝado, lignohakado, turismo, tio ne eblus facile konkludi al sukceso. Kiun ajn unuon aŭ kiujn ajn plurajn kombine ni elektos, almenaŭ ni devas reobservi nian identecon kaj kulturon respekti riĉon de naturo t.n. tajgo."

Ni revenu al la rakonto de Jakob. "Ni udegeoj estas idoj de la ĉi tiea neobeanta

reĝlando Bohai. Poste Ĝingis-Ĥano atakis, kaj nia etno fariĝis malgranda." Ili tion kredas. "Post la rusia revolucio, ni, kiuj vivis nomade, estis kolektita en vilaĝojn kulturi. Oni faris asimiligan politikon en ruson. En periodo de Stalino kunvivintaj ĉinoj eliris pro trudita transloĝado, kontraste rusoj envenis. Krome estis tia ĉino, kiu restis ĉi tie ŝanĝinte sian nomon en la udegean. En sovetia periodo oni senpage provizis nin per pafiloj, kugroj necesaj por ĉasado, benzino ktp. Post la disrompo de la Soveta Unio ni estis devigita aĉeti necesajn aĵojn. Vivo de multaj sen mono malfaciliĝis." Kiel ili vivtenas nun? "Antaŭe tigra felo kaj cerva korno estis kare venditaj al Ĉinio kaj Japanio, sed nun ni vendas felojn de zibelo kaj de cervo al rusoj. Pro la hakado malmultiĝis aproj manĝantaj fruktojn de arbo kaj malmultiĝis tigroj manĝantaj apron, kontraste ofte aperis cervoj manĝantaj plantojn sur la resto de la hakado." Li uzas kaptilon por ne difekti la felon.

Jam apenaŭ meznoktiĝis, kaj ni devis reiri nian gastan hejmon antaŭ la ĉeso de la elektra funkciado. "Vi fratoj el malproksima lando, bonvolu anonci al multaj personoj, ke ni tie ĉi vivas kaj batalas." Ĉe nia disiĝo Jakob ripetis serioze. "Tiu arbaro kun netuŝita tajgo ne nur estas nia vivo, sed ankaŭ estas la trezoro de la tuta loĝantaro en la Apudmara Regiono eĉ en la mondo. Mi esperas ke vi informu diversajn organojn kaj homojn. Se vi faros bone, ni povos gardi la arbaron. Nepre ankoraŭfoje vizitu tien ĉi kaj parolu en la aina, mi esperas." Li adiaŭis per la udegea dankvorto <Asasa, asasa>. Sur la ĉielo brilis plenaj steloj, kiujn certe rigardis liaj avino kaj praavino.

Daŭrigota

読書録

「コーラン」とツルゲーネフ「初恋」

豊蔵　正吾

後藤さんから、コーランをやってみないか、ということで、La Nobla Korano と中公バックスの「コーラン」を手に入れ、2000 年 12 月から、2001 年 12 月まで、丁度 1 年かかって読み終わった。

その中公バックスのコーランの 306P にターハー（キリスト教徒）の章がある。「ところが、サタンは彼にささやきかけて言った。『アダムよ、おまえに不死の木と不滅の　を教えてやろうか。』　二人がそれを食べると、自分の隠し所が目に見えた。それで二人は楽園の木の葉でそこを覆い始めた。アダムは主にそむき、道を誤ったのである。」

勿論、コーランには、目には目をの言葉、妻は 4 人までよいという章はあるが、亡くなった伊藤直樹さんの言ったとおり旧約聖書は読んでおく必要がある。

又イスラムでは労働の対価以外の報酬を受けとってはならない、人も金も神が与えたものであり、イスラムの金融機関は、利子利息の概念そのものを禁じている。基本にあるのは喜捨の考え方で、資本主義に対するアンチテーゼがイスラムにおいては言われていることを読んだことがある。

最近読んだものとしては Ivan Turgenev の"La Unua Amo"があり、2003 年 11 月 17 日から 2004 年 1 月 4 日に読み了えた。

Turgenev の悲哀はその柔らかみと悲劇性の姿において、本質的にスラブ民族の憂愁であり、スラブ民謡のそれにつながっていると、デンマークのゲオルグブランデーは言っている。

女主人公ジナイーダ・アレクサンドロヴィナが死ぬ前、モスクワ河のふちを、父と子が馬に乗って走る美しい姿が記憶に残ったが、私も二度程モスクワ河のほとりを通ったことがあるが、トラックに乗せられてである。

人類に一つ言葉を！

1951年に書かれた文です。この有名な人がエスペラントの味方であったとは知りませんでした。本名は明子と書いて「はるこ」。85才まで長生きしました。誰もが知っている、あの一言は、女性のみならず、男をも解放してくれたと、編集者は思っています。と、言えば誰かわかるでしょう。正解は次号で。

この二月十日で、満六十五才になったこのわたくしが、いまもってよくみる夢は、英語を勉強していた娘時代のことです。

どこの英語学校にはいろうかと、いろいろ迷っている夢や、長い文章の暗誦をしなければならないのに、それに記憶力が、ひとより劣っているので、なかなか友達のようにあっさり覚えられなくて、弱りきっている夢とか、また近頃みたものに、外人の先生が新しく代わったため、さっぱり話がききとれないで困ったあげく、「好いわ、もうわたしは聞くことも、話すことも断念するわ、その代り読むこと、書くことだけ大いに精出すわよ」と、やっきになってひとにはなしているところとかいうような工合に、どれもこれも英語で苦労している夢ばかりなのです。

こういう夢を見るたびに、わたしは、ああまたかとあきれもし、いやになりますが、よくよく自分には英語の勉強が苦労になっていたのだなと、改めておもいかえさずにはいられません。去年からわたしの家に、親戚の娘がひとり来ています。その娘は、ある通信社に勤めて昼は働き、それからフランス語の夜学に廻るので、家へ帰るのは、いつもたいてい九時過ぎになります。おそい夕飯をすませ、それから就寝までの一、二時間を、彼女はまたフランス語と取組んでいます。そんな風で、一つの他国の言葉を学ぶことだけに、自分のもっている自由な時間の大部分をとられてしまいますから、ほかのしたいことは、そのために、ほとんどできなくなってしまいます。

これは、もちろん彼女だけが、そうだというのではありません。学生はみんなそれぞれ他国の言葉の一つや二つは学ばなければならないのですし、ことに今の若い人は、だれをかも英語に浮き身をやつしていますから、きっとこの娘も同じだろうとおもいます。これでは日本中の人たちが語学の勉強に費やしている時間とそのエネルギイはたいへんなものでしょう。が、もしこれだけの多くの時間とエネルギイを、ほかの研究や思索や労作に、ふりむけることができたならば、それこそその人生において、もっと好い事が、たくさんできるのではないでしょうか。

しかも、これはまた日本だけの不幸ではありません。世界中の各国、各民族が、言葉を異にするために、お互に払っているばかげた無駄と損失が、人類全体の進歩をどれだけ妨げているか、それは想像以上であろうとおもいます。

この世界には、現在三千に近い違った言葉があり、聖書が訳されている言葉だけでも一千百余りもあるということです。交通機関も通信機関も発達しなかった昔は、まだそれですんでいました。しかし今日のように科学の進歩で、地球はますます狭いものになり、もうわたくしたちは、何をする

にも　―　政治にしろ、経済にしろ、教育、文化に関するものにしろ　―　すべて世界的視野で考え、行わなければ生きられなくなってきているのに、それにもかかわらず、いつまでもお互に通じない言葉を使っているとは何という矛盾でしょう。

国の対立と言葉の相違と　―　この二つの壁が人類に投げかけている暗い影をよく考えてみましょう。

世界平和の実現のため一つの世界をつくろうと努力している世界連邦主義者が起草した世界憲法草案の一つに、シカゴ案とよんでいる最も理想主義的世界機構をえがいたものがあります。その中に連邦政府は、その設立より三年以内に、連邦語として一つの言葉をしているという一カ条があります。世界連邦国家が、連邦語として全人類共通の一つの言葉を使うことは、とうぜんであり、そうあるべきですが、“人類に一つの言葉を！”というこの人類の夢の実現を、予告するものとして、この条文は、強くわたくしの心をひきました。これがエスペラントであるか、それとも他の何語であるかは、もちろん記されておりませんが、このシカゴ草案の起草委員たちの心には、きっとエスペラントがあるのであろうと、わたくしは思い、またそれを望んでもいます。

今日、国際語として、英語が使われていますが、これは国際社会で支配的地位にある国、つまり大国の言葉が、国際語となっているので、どうも人類平等、各国対等というたちばからもあまり面白くありませんし、不便であり、不公平であることを免れません。連邦語はそれでは困ります。どうしてもどこの国の言葉でもない世界語　―　あの平和主義者ザメンホフの、深い人類愛の結実であるエスペラントでなければならないとわたくしは思っています。

幸い、人工的に創案されたこの言葉は、英語などよりすべての点で、はるかに学びやすいのですから、連邦語として指定されるならば、そしてその構成諸国の人々が、みなそれぞれ自国語と同時に、早くから　―　少くとも小学教育の最初から教えこまれるならば、大した苦労もなく世界中の人々が、世界人としての自覚とともにエスペラント語を身につけることが出来るのではないでしょうか。

第一回万国エスペラント大会が、フランスで開かれたのは、この世紀の初頭、一九〇五年のことでした。トルストイはこの言葉を世界にひろめることを、地上天国建設の助けとなる、といったそうですが、半世紀後の今日、戦争の根源を絶って恒久平和の地上天国を建設しようとする世界連邦運動を通じて、ザメンホフの夢や理想の実現が、ようやく近づきつつあるかにみえるのは、人類にとってまことに大きな希望です。

わたくしの言うことは、この世界危機のきびしい現実に、目をおおった、甘い夢だと笑われるかもしれません。しかしわたくしは、世界はやがて一つになるのが歴史の必然の過程であり、今日の二つの世界の対立も、それへの前提であり、滅亡するかに案じられるこの人類の大きな危機も、人類の成長、完成への一つの段階であり過程であると信じています。

わたくしたちは、いつでも現実を視る鋭い眼と、遥かな未来を見透す長い眼と、心の内側を凝視する、かって瞬きをしたことのない深い眼と　―　この三つの眼をもって生きたいとおもいます。

第４回委員会

2004年１月10日　札幌市北区ロンデタージョにて

参加者：星田淳　佐藤英治　横山裕之　宮沢直人　後藤義治　樺山裕介　須藤昭三　近藤まゆみ　金森美子

会費滞納者に催促文をだす。メールマガジンの広告をJEI会誌Revuo Orientaに載せる算段について経過報告。　新年会黒字会計。北海道大会にウラジオより参加希望あり。滞在費をHELが負担。賛成多数で「イラク派兵反対決議」を採択。

REZOLUCIO KONTRAŬ SENDO DE JAPANA MEMDEFENDA KORPUSO AL IRAKO

La 10-an de januaro, 2004

La 4-a Komitata Kunsido de Hokkajda Esperanto-Ligo

La 1-an de marto pasintjara ni rezoluciis

" Refoje milito estas okazigota. Ni scias, ke la viktimoj estos ne nur batalantoj, sed ankaŭ multaj civitanoj inklude infanojn, se la milito komenciĝos."

por averti la publikon pri la danĝero, kvankam nia voĉo estas tre modesta.

Kiel ni antaŭvidis kun timo, Usono kun sia koterio komencis militon spite al porpacaj klopodo de UN(Ununiĝinta Naciaro). Laŭ la ĉarto de UN tion oni nomu "Agreso kontraŭ la Iraka Regno".

La "Amasdetruaj armiloj", kiujn neniigi per armita forto estis la motivo de la atako laŭ la aserto de la invadintoj, ne estis uzitaj ĝis la okupiĝo de la tuta teritorio, nek trovitaj ankoraŭ nun.

Tiel klariĝis, ke tio estis nur sinpravigo de la invadintoj, sed ili intencas sin pravigi dirante, ke ili celas demokratiigi Irakon.

La fakto, ke la batalmortintoj de la okupantaj armeoj post la "Deklaro de batalfino" de usona Prezidento Bush kreskas pli ol tiuj mortintoj ĝis tiam, montras, ke la milito daŭras ankoraŭ.

Iuj komprenas, ke tio okazas pro la rezistado de la popolo.

Allogi amikojn al kunkulpi por malpezigi sian kulpon, estas ĉiamaĵo de krimuloj. Usono klopodas sendigi armeojn de siaj amikaj landoj al Irako, kaj Koizumi, japana

ĉefministro, nur sekvas tion.
Japanaj ĵurnaloj informis, ke urbanoj de Samawah, kien japana registaro planas sendi japanan Memdefendan Korpuson(oficiala nomo de japanaj armeoj, MK), montris panelon kun japanaj literoj "Bonvenon Japana Memdefenda Korpuso!". Sed la originala araba teksto estis ne sama, sed "Bonvenon Japanoj!".
La urbanoj komprenis, ke venos japanaj firmaoj kaj savos senlaborulojn.
Do ilia espero srumpis kiam ili eksciis, ke venos nur armeanoj. Ilia deziro estas "Ni jam ne bezonas armeojn, sed laborojn!"
Parolis ĵurnalisto bone konanta Irakon, "Irakanoj sentas estimon kaj simpation al japanoj, kiuj restarigis el ruinoj pro usonaj bombardoj kaj atomatakoj, konstruis landon de modernaj industrioj. Ankaŭ en Irako oni amas uzi produktaĵojn el japanaj fabrikoj. Se MK iros al Irako laŭplane, efektive tio estos helpo al la okupantaj armeoj, do mi timas ŝanĝiĝon de tradicia simpatio de iraka popolo al japanoj."
La devo de MK estas "Defendi pacon kaj sendependecon de Japanio" kiel esprimita en la Leĝo de Memdefenda Korpuso. Sendi ĝin laŭ postulo de alia lando eksterlanden al batalejo estas neglekto kontraŭ la leĝo.
Nun planata sendo de MK ne nur perdigos internacian konfidon de Japanio, sed signifos efektivan partoprenon en "Milito" komencita sen pravigebla motivo, kaj tiel neglektos la konstitucion kaj la leĝon de MK. Tial ni, kiel esperantistoj loĝantaj en Japanio, esprimas malkonsenton por tio.

[Aldonoj]
1. Ni konfirmas, ke estis alia opinio kontrau supra rezolucio, ke Japanio ne povas ne subteni la agojn de Usono, aliancano, ĉar japanio ne povas efektive sin defendi.
2. En la procedo de diskuto pri supra rezolucio aperis opinio, ke ni atentu kaj protestu kontraŭ gravaj atencoj kontraŭ homaj rajtoj en DPR(Demokrata Popolrespubliko) Koreio kaj kontraŭ subpremo al tibeta kaj aliaj minoritatoj kaj lastatempa rapida kresko de armado fare de Ĉina Popola Respubliko.
Pri tiuj punktoj ni konfirmis, ke ni havos diskuton laŭokaze, kaj se necese, havos apartan rezolucion.
3. Pri opinio, ke iu parto de esperanta movado en Japanio agas kontraŭ Usono kaj Japanio sub devizo de neŭtralismo, ni kredas, ke ni, per sinceraj diskutoj kaj agadoj, povos konvinki la publikon pri nia starpunkto de pozitiva neŭtralismo.

イラク派兵反対決議

2004年1月10日
北海道エスペラント連盟　第4回委員会

昨年3月1日我々は
「戦争に反対する決議」を発表し「ふたたび戦争が起こされようとしている。戦争が開始されれば戦闘員のみならず、子供を含む多くの市民が犠牲となることを我々は知っている。」
と、微力ながら世論に訴えた。

恐れていた通り、その月のうちにアメリカの支配下にある国々を巻き込んで強引な武力行使が、国連の平和解決への努力を無視して開始された。国連憲章の規定によれば「イラクに対する侵略」と見るべき事態になった。

侵入国が武力行使の理由とした「大量破壊兵器」はイラク全土が占領されるまで使用されず、いまだに発見されてもいない。戦争を正当化する言い訳に過ぎなかったことが明らかになると、「イラクの民主化が目的」と、言い逃れをしている。

参戦国による「戦闘終結宣言」以後の占領軍戦死者数が、それまでの数を上回って増加しているのは戦争が継続中であることを明らかにしている。
ある人々はそれをイラク民衆の抵抗闘争とみている。

自分の罪責を軽くするために共犯者を誘い込むのは、犯罪者の常套手段。アメリカは自国に親しい政府に対する「派兵工作」に力を入れているが、小泉首相はただそれに追従するだけだ。

自衛隊派遣予定地サマワに出た日本語の「歓迎」幕は、原文では「日本人歓迎」であり「自衛隊歓迎」ではなかった。「日本の企業が来て失業救済になる」と期待した現地の人たちは落胆を隠せないでいる。「もう軍隊は要らない、仕事がほしい」が現地の実情である。

現地をよく知る新聞記者の話を聞いた。「イラク人は日本に対して尊敬と親しみを持っている。米国の原爆などの攻撃で全土を破壊されても立ち上がって近代工業国家を築いたことが評価されている。イラクでも日本メーカーの製品は愛用されている。今のやり方で自衛隊が行っても、当然『占領軍への援助』であって、伝統的な親日感情も変わってくるかもしれない」

自衛隊の使命は、「わが国の平和と独立を守る」ことと自衛隊法に明記されている。外国からの指示によって国外の戦地に行くのは違法である。

現状での自衛隊派遣は、日本の国際的信用を落とすばかりでなく、大義なく始められた「戦争」に加担することになり、憲法・自衛隊法にも違反する行為である。以上により我々は、日本に住むエスペランチストとして反対の意思を表明する。

付記

1.日本国が事実上自主防衛をなしえない以上、同盟国・米国の行動を支持せざるをえない、との反対意見があったことを確認する。

2．また今回の決議案についての討論の過程で、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)による重大な人権侵害の存在、中華人民共和国(中国)のチベット族など諸民族への弾圧と近年の急速な軍備拡張について注目し反対すべきとの意見が出た。この点については機会をみつけて討論し、必要があれば別に決議を行うことを確認した。

3．日本のエスペラント運動の一部に中立をかかげながら反米・反日の言論・行動を行っている運動があるという意見に対しては、真摯な討論と行動を通して我々北海道エスペラント連盟の積極中立主義の立場に対する民衆の理解を得ることができるものと確信する。

PROVERBARO　*L.L.Zamenhof*

Kiu mizeron ne havis, mizeron ne konas.
Kiu nenion valoras, plej multe sin gloras.
Kiu okazon forŝovas, ĝin jam ne retrovas.
Kiu tro multe deziras, nenion akiras.
Leĝo valoras por poste, sed ne por antaŭe.
Ligi praktikan spiriton kun idealismo.
Oni ne pagas per gloro al sia tajloro.
Oro nur fingron eksvingas, kaj ĉion atingas.
Pli bona branĉo sennuksa, ol kaĝo plej luksa.
Pli bona homo sen mono, ol mono sen homo.

＊SFERILO:変形Ａ４版１枚２頁。 SFERO（=San Francisco Esperanto Regional Organization）発行、2003年11月例会予告号。英語・エスペラント混在。
＊La Tamtamo: 第 350号(2003 年10月, Jokohama Esperanto-Rondo=JER), A4 X 4 頁、日本語。
＊受講生通信　第91号, 2003-11-01, 沼津エスペラント会, B5X12 頁のうちＥ文約３頁。2004年の91回日本エスペラント大会（犬山）の案内第１号同封。
＊Mejlŝtono 2003 novembro N-ro 180, 仙台Ｅ会：B5X8頁の内Ｅsp文１頁は日本エスペラント大会に中国貴陽市から参加した F-ino MU Hongyan(回族）の仙台訪問について。
＊La Movado;KLEG（関西エスペラント連盟）発行、N-ro 633 nov. 2003, B5 X16頁の内Ｅ文は計２頁半。苫小牧での北海道大会の記事。「橋渡し言語から群れ言語へ（臼井裕之）」は現在のエスペラント運動（またはエスペランチスト）の、ある傾向をよく説明している。 Kajero Libervola(AIKAWA Setuko)は、
－sinjorino は edziniĝinta virino だけを　あらわすのか？
－ne devi は本来　「義務なし、必要なし」のはずだが？
を考えさせる。
KLEG図書目録2004が付録。
＊NOVA VOJO: 2003.11:N-ro 390 novembro 定形封筒版 X66頁（表紙とも）中Ｅ文１２頁半. エスペラント普及会(EPA)発行。この会は従来「大本エスペラント普及会」だったが１１月、その母体組織である宗教法人大本の総代会で名称が変更された。また会の目的も「本会は世界平和実現のためエスペラントの普及を目的とする」と、簡単明瞭になった。
内容の大半は１０月亀岡で開かれた第90回日本エスペラント大会の記事と写真。
＊SFERILO:電子受信:SFERO発行、2003年12月例会予告号。英語・エスペラント混在。11月例会報告。夏頃 San Francisco Chronicle に出たＥについての記事についてEl Cerritoの図書館から問い合わせがあり、説明するうち、その図書館でエスペラント展を開くことになったが、なんとそこに Kapitano Postnikov のお孫さん(nepino)が見えたとのこと。
本の紹介に Japana Esearo, Raportoj el Japanioなど日本もの。Cent-persona vilaĝo（世界が百人の村だったら）については「白人の定義は？」「大洋州が無視されている」と異議が出たそうだ。
（注）Fjodor A.Postnikov: 創始者ザメンホフに会ったこともあるロシアのエスペランチスト、1891年ウラジオストクでアジア最初のエスペラント会を結成したが日露戦争後米国に移り、そこでも長くエスペラントのために働いた。
＊La Movado;KLEG発行、N-ro 634 dec. 2003, B5 X16頁の内Ｅ文は計２頁。
第９０回日本エスペラント大会の記事が２頁、Mikspotoに８月の毎日新聞の苫小牧エスペラント会関連記事のことなど。「今は昔の物語」対訳で連載中。
＊礼状：エスペラント普及会会長　S-ro 出口京太郎　より
「ＥＰＡ創立80周年記念行事」参加や第90回日本エスペラント大会への協力などについての礼状
＊Hokkaidô Rômazi Kenkyû No.118 （復刊91）北海道ローマ字研究会 Hs.15n.12 ĝt.01nt., B5 X８頁、日本文。10月の勉強会は郷土作家石森延男について。受贈資料に「ｶﾅﾉ ヒカリ」920ｺｳ のヤマサキセイコー論文、Heroldo de HEL N-ro 97, 98紹介。
＊VOJO SENLIMA;N-ro 158,Decembro2003 熊本エスペラント会. B5 X12頁、和文、francaj Ges-roj Suno kaj Luno 来訪記など。
＊SFERILO:2004-1月例会予告号。SFERO発行、12月例会報告
この号は紙（259X215mm)1 枚2 頁。
エスペラント、一部英語
＊La Tamtamo: 第 352号(2003 年12月, JER, A4 X 4頁、日本語。読書会報告は LA BATO(Lena Karpunina), エスペラント原作短編集、タジキスタンの物語
＊NOVA VOJO: N-ro 392 januaro 2004 B5 X32頁のうちＥ文６頁. EPA
＊La Vulkano: N-ro 145, Vintro 2003 : LA ORGANO DE HUKUOKA ESPERANTO-SOCIETO:B5 X 8頁、日本文。多数のカラー写真が美しい。
＊La Movado;KLEG発行、N-ro 635 jan. 2004, B5 X20頁の内Ｅ文は計３頁半。
La plej grandaj ŝtelistoj(Joel Brozovsky）米国の権力と大資本の癒着を描く。今年の北京UKをひかえ中国関係文献の紹介が多い。
＊受講生通信　第92号, 2004-01-01, 沼津エスペラント会, B5X10 頁のうちＥ文は計１頁。菅原路子さん（札幌）のお便りが出ている。

Ne konsultu vortaron antaŭ pripenso

学習の小窓　エス和辞書に頼るのは最後の手段

樺山　裕介（研究教育部）

「第一書」16条の文法より（和訳：横浜の土居智恵子さん）
第11条　単語と単語をつないで合成語をつくる。（主となる単語は後ろに置く）
第15条　ほとんどの言語が同じ語源から採用しているいわゆる外来語はエスペラントの表記に従って、そのまま使うことができる。しかし同じ語源から派生したいろいろな単語は、基本となる単語だけをそのまま使い、その単語からエスペラントの規則に従って他の派生した単語を作っていくのが望ましい。

国際共通語は、とことん簡便かつ合理的でなければなりません。だから、エスペラントでは、語根の数を最小限にし、その語根を組み合わせることで幾千もの単語を作り出すのです。その組み合わせは、エスペラントを書いたり話したりする人が自分の考えでやっていいのです。それを読んだり聞いたりする人は、初めての表現にちょっととまどったにしても、ちょっと考えればわかるのです。わからなければ、また別の組み合わせを、脳の引き出しにある別の語根から作り直して試してみればいいのです。覚えることは少なく、使い方は自由で、しかも通じるからこそ、世界語なんです。

なのに、わからない単語が出てくると間髪を入れずに辞書をめくる人ばかり。あげくに、その表現が「辞書に載っていない」と騒ぎ出すにいたっては哀しくなります。そんなことやっていたら、いつまでたっても会話はおろか、人工語エスペラントの本来の醍醐味を味わうことすらできません。

言わせてもらいます。まず分解しなさい。分解してから自分の頭で考えなさい。辞書の出番はそれから後のことです。そのちょっとの我慢が、真の融通無碍なエスペラント世界への唯一の道なのです。

文中に知らない単語ｘに出くわしたらどうするか。参考までに私の場合です。

①ｘをふくむ段落全体を先に読む。（ｘにとらわれるより、筆者がその段落で何を主に伝えたいのかを受け止めようとすることが大事。それがコミュニケーション。）

②ｘの前後から考えて、ｘに何があてはまるか思いを巡らせる。（たいがい、その予想ははずれる。しかし、「ああ、そうだったのか」という感動が後の記憶力を助ける。）

③（②と同時に）ｘを語根に分けて考える。

④分解した語根を、ヤマサキ　セイコー編「エスペラント語原小辞典」で引く。
（この辞典のはじめの頁にある引用。

人が術語が覚えにくくて困るといふと、僕は可笑しくて溜まらない。なぜ語原を調べずに、器械的に覚えようとするのだと云ひたくなる。
森鴎外「ヰタ・セクスアリス」

⑤語根をエス-エス辞典（PIV またはＰＶ）で調べる。（エス和辞典に載っている日本語は、そのエス単語の意味・概念に最も近いとおもわれる日本語表現を、優秀な編集者が知恵をしぼって日本語の語彙から選んだもの。あくまで近似の表現です。それが異言語辞書の限界です。1 対 1 でエス語と対応する日本語が必ずあるという考えは捨てましょう。）

⑥語根をエス和辞書で調べる。（最近では、私はめったにエス和を使いません。）

⑦近い将来また出てきそうな単語なら、声に出して覚えようとする。もっと上達してからでないと使わなそうな専門用語、自分の知っている表現で代替の効く単語ならば、その場限りにして後回しにし、限られた脳味噌の労力をもっと優先すべきことに振り向ける。

エスエス辞典や語源辞典は安価ではないですし、初級者に PIV はたいへんでしょう。しかし、いま脳内に持ち合わせてものでせいいっぱいやるのがエスペラントの正しい態度です。それができるのがエスペラント。Oriento（東）が思い出せずに malokcidento（反西）と言って通じさせた昔を思い出します。それでいいんです、みなさん！

支援のお願い

横山　裕之

ＨＥＬ委員で広報を担当させていただいている横山と申します。

アイヌタイムズ事務局長でアイヌ民族の萱野志朗さんより、以下のような依頼がありました。
「１９９７年３月にアイヌ語による新聞・「アイヌタイムズ」（季刊）が、世界で初めて出版されました。発刊当初の発行部数は１０００部で購読者数６３０人（団体も含む）でした。購読者の購読期間の満了に伴い、購読者数が少しずつ減り続け発刊丸７年を目前にしておりますが、現購読者数は１３０人となり採算ラインぎりぎりの状況です。
　つきましては、アイヌ語の新聞発行を続ける為には皆様のご理解が是非とも必要です。購読を希望される方は、アイヌ語ペンクラブ事務局までご一方願います。折り返し「購読のご案内」をお送り致します。」

この事業は、今まで差別があったアイヌ語による表現、出版を日本及び全世界へ普及させることを目的としています。その任意団体として、「アイヌ語ペンクラブ」があります。
中心となっているのは、アイヌ民族でペンクラブ会長の野本久栄さん、同じくアイヌ民族で事務局長の萱野志朗さんです。ちなみに私も、「アイヌ語ペンクラブ」の会員になっています。

プラハ宣言に、言語上の権利、言語の多様性が謳われていますが、アイヌ語の復権活動にご理解、ご協力をいただけましたら、「アイヌタイムズ」の購入をしていただけると大変ありがたいと思います。買っていただけそうな方にお声をかけていただくだけでも助かります。なお、アイヌ語の記事を投稿することも可能です。編集会議で、編集いたします。

１２月の委員会において、委員の皆様方のご理解を得て、ＨＥＬとして一部購読していただけることになりました。「アイヌ語ペンクラブ」の会員として、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

購入につきましては、以下のようになっています。購入していただけそうでしたら、よろしくご検討ください。

購入方法

　アイヌタイムズは、札幌のサッポロ堂書店（北１０条西４丁目、TEL&FAX:011-746-2940）で店頭販売されています。また、通販でも購入できます。ご希望の方は、郵便振替がご利用できます。お名前、ご住所、通信欄に希望される内容をご記入下さい。

＜定期購読＞
　Ａコース（アイヌタイムズ本紙のみ）：購読料１５００円（1年、４号分）
　Ｂコース（アイヌタイムズ本紙＋日本語版付き）：購読料２３００円（1年、４号分）
　いずれのコースも、最長で３年の申し込みができます。

<バックナンバー>

アイヌタイムズ本紙　創刊号～第２７号：各１部３００円

アイヌタイムズ日本語版　第４号～第２６号：各１部２００円

送料は別途負担していただきます。１部の場合は９０円。

注：ただし、日本語版のみのご購入はできません。アイヌタイムズ本紙を店頭もしくはAコースでご購入された方で、あえて当該の日本語版をご希望の方は、その旨を通信欄に明記の上お送り下さい。

郵便振替口座　０２７１０－２－１３３１４

加入者名　アイヌ語ペンクラブ

購読申し込みに関するお問い合わせは、以下までお願いいたします。

〒055-0101　北海道平取町二風谷 80-25　　萱野志朗様宛

以下のホームページもご参照ください。

http://www.aa.alpha-net.ne.jp/skayano/menu.html

http://www.geocities.jp/otarunay/

http://sapporo.cool.ne.jp/kumanesir/

アイヌタイムズの内容については、HEL のホームページにも、私の投稿分だけですが、エスペラント訳も入れて、以下のところに掲載してます。Helordo de HEL にも何度か投稿したことがあります。

http://www5d.biglobe.ne.jp/~hel/JOKO/miaarti.htm

平成 15 年 12 月 1 日現在、第 27 号まで発刊してますが、第 23 号までの記事の見出しについては以下のページに掲載してます。

http://sapporo.cool.ne.jp/kumanesir/aynutime.htm

（文責：横山裕之）

HEL のホームページ

Es 版：http:www5d.biglobe.ne.jp/~hel/index.htm

日本語版：http'//www5d.biglobe.ne.jp/~hel/jp/index.htm

アクセス数 34576

更新履歴

89　2003.9.8　アイヌ民族の優れた言語学者・知里真志保とエスペラント

90　2003.11.20　国際音声記号（IPA）によるエスペラントの発音表記

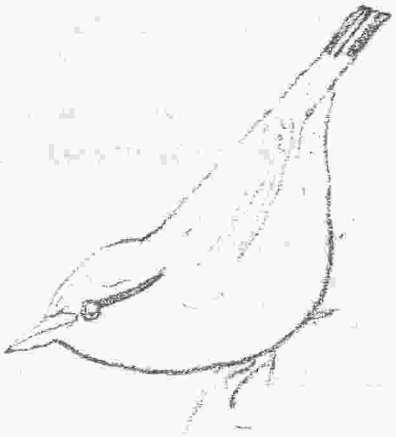
91　2004.1.26　第 67 回北海道大会パネルディスカッション

92　2004.1.28　イラク派兵反対決議

93　2004.4.3　5 月合宿

新緑の小樽天狗山山荘に来ませんか？

日時－2004：5：15（土）PM13：00
　　5：16（日）AM12：00
場所－小樽天狗山山荘
会費－４．５００（宿泊の方）
　　３．０００（宿泊無し、夕食付き）
講師－　入門--佐藤英治 HEL 事務次長
　　中級一星田淳 HEL 委員長
プログラム



５月 15 日（土）　PM　13：00　受付
　　13：30～17：30　学習開始
　　入門。　中級と二つに分かれる
　　18：00～夕食　バンケード
　　20：00～22：00　HEL 委員会
　　22：00～就寝。
５月 16 日（日）AM　7：30～朝食
　　8：30～11：30 学習開始
　　11：30～山荘出発
　　12：00～散策して解散

申し込み先　札幌市北区麻生町１-3-13
　　ロンデタージョ
〆切日
沢山の参加をお待ち致して居ります。

Heroldo de HEL
第 99 号　(2004. 4. 29)
北海道エスペラント連盟機関誌
編集部　〒001-0045
札幌市北区麻生町 1-3-13
ロンデタージョ
樺山　裕介
tel/faks 011-717-4189

郵便振替口座
02700-6-17075
北海道エスペラント連盟
正会員　3000 円　家族会員　1000 円
青年会員(25 歳以下)　1500 円
購読会員　2000 円